

『安樂集』と五念門について

研究生 杉山 裕俊

『安樂集』には曇鸞の著作が数多く引用されており、道綽がその教義思想に強い影響を受けたことは間違いないであろう。ところが、『往生論註』所説の難易二道や八番問答が引用される一方、『安樂集』には曇鸞浄土教の主たる実践行であり、なおかつ浄影寺慧遠や道綽以後においても積極的に引用される五念門への言及は全くみられない。このような『安樂集』と五念門の関係について、『安樂集』に散見される礼拝・讚歎・作願・觀察・回向等の用例を再整理し、道綽が五念門という実践体系をどのように捉え、何故に念仏三昧を時機相應の往生行として勸示したのかを考察した。

道綽は『安樂集』第二大門の中で、『往生論註』讚歎門に付属する一文を依用し、往生するためには三種の信心を具足することが必要であると説く。また觀察門に関して、曇鸞が提示する「觀」の二義のうち、①觀察行による往生については第一大門で、②觀察行によつて浄土に往生した者が寂滅平等を得ることについては第九大門で、『往生論註』を直接引用し、阿弥陀仏の浄土に往生した者は淨心の菩薩と同じであり、最終的には上地の菩薩となつて寂滅忍を得るとしている。この他にも、『安樂集』には曇鸞の五念門解釈の影響が処々にみられることから、道綽は五念門の構

造そのものを強く否定しているわけではなく、個々の内容に関してほむろ肯定的に扱っているといえる。とはいへ、道綽が五念門という実践体系を採用していない以上、『安樂集』にも実践行の提示を求める必要があり、同時にそれは第四大門を中心に説かれる念仏三昧であると考えられる。道綽は第四大門において、念仏三昧が時機相應の往生行であることを証明するため、『觀仏三昧海經』をはじめとする諸大乘經論を博引傍証している。すなわち、これらの大乘經論すべてが念仏三昧の典拠となつており、道綽が提示する念仏三昧とは単に称名だけではなく、広義には礼仏・咨嗟・作往生意・觀察・廻願往生等を含むものであると思われる。加えて、道綽は五つの問答によつて念仏三昧の利益を明かしているが、これら一連の問答から、道綽にとつて念仏三昧とはあらゆる仏道修行を統攝した実践行であり、その利益は見仏や往生だけではなく、現世における除障や延命、さらには未來世での得証にまで及んでいることがわかる。だからこそ、道綽は第一大門で、「一切の三昧の中の王」と称し、念仏三昧を徹底して勸示するのである。

以上、『安樂集』における念仏三昧とは諸大乘經論の經証にもとづく易行道の実践であり、願生者が阿弥陀仏に対して行う全身的行爲を包括したものである。道綽が五念門を採用しなかつた背景には、このような念仏三昧によつて願生者が修すべき実践行を画一しようとする意図があつたのではないだろうか。